

平成16年2月29日(日)

第三二五回 史跡めぐり 資料

早春の江ノ島 腰越 稲村ヶ崎

越谷市郷土研究会



☆第三二五回 史跡めぐり ご案内

早春の江ノ島 腰越 稲村ヶ崎

と き 平成16年2月29日(日)

集 合 午前8時 JR南越谷駅前

コース 南越谷駅⇨(武蔵野線)⇨南浦和駅⇨(京浜東北線)⇨東京駅⇨(東海道線)⇨藤沢駅⇨(江ノ電)⇨江ノ島駅⇨「弁天さま・卯之助力石」江ノ島神社⇨江ノ島駅⇨(江ノ電)⇨腰越駅⇨「義経腰越状」満福寺⇨腰越駅⇨(江ノ電)⇨稲村ヶ崎駅⇨「新田義貞・太刀投げ」稲村ヶ崎・「真白き富士の嶺」七里ヶ浜⇨稲村ヶ崎駅⇨(江ノ電)⇨鎌倉駅⇨「卯之助力石」小町通り散策⇨鎌倉駅⇨(横須賀線)⇨東京駅⇨(京浜東北線)⇨南浦和駅⇨(武蔵野線)⇨南越谷駅

／解散／

参加費 四、五〇〇円

案内者 幹事長 宮川進

車窓 つれづれなるまに

○むかしの東海道は品川駅から大井町駅(通過)間は東海道線の左側を、大森駅(通過)あたりは右側を通過していたらしい。

○大井町駅(通過)と大森駅(通過)との間に、モースが発見し、日本の考古学の第一歩となった大森貝塚がある。右側に、品川区の「大森貝塚」の立て看板と、大田区の「大森貝塚」の碑があるのに注意。

○多摩川の鉄橋をわたると、川崎市。渡ってすぐ、右側のリクルートの大きなビルが例の大塚猿轡発の端緒となったもの。

○鶴見駅(通過)のあたり、右側の山の上に見える大きな寺が、曹洞宗の、永平寺とならぶ大本山・総持寺です。

○江ノ電・鶴沼駅付近は、いわゆる湘南・鶴沼の高級別荘、住宅地域です。

○江ノ電・腰越駅から稲村ヶ崎駅の間は、右側に注目。七里ヶ浜の海岸がみえます。志賀直哉や長手善郎なども、このあたりで、海を眺めたとのこと。

○お土産には、江ノ島・駅から帰るまでの右側、玉屋の羊羹、江ノ島、紀の国屋の手作りのおまんこ、井上蒲鉾店(かえりの江ノ電・鎌倉駅改札口からJRへの通路左側)の小判揚など、いかがでしょう。

二〇 鎌倉

- 一 七里が濱のいそげ傳ひ、  
稻村崎、名將の  
無投せし古戦場、
- 二 極樂寺坂越え行けば、  
長谷觀音の堂近く、  
露坐の大佛おはします。
- 三 由比の浜邊を右に見て、  
雪の下道通行けば、  
八幡宮の御社、
- 四 上るや石のまさはしの  
左に高き大いてふ、  
阿はばや、遠き世世の跡、

東海道

- 一 汽笛一聲新橋を  
はや我汽車は離れたり
- 二 右は高輪泉岳寺  
四十七士の墓どころ

五 若宮堂の舞の袖

- しづのをだまきくりかへし  
かへしし人をしのびつつ、
- 六 鎌倉宮にまうてては、  
愛きせぬ親玉のみうらみに、  
悲憤の涙わきぬべし、
- 七 歴史は長し七百年、  
興亡すべてゆめに似て、  
英雄墓はこけむしぬ、
- 八 建長・圓覺古寺の  
山門高き松風に、  
昔の音やこもるらん、

新訂尋常小学唱歌第六学年用（昭和7年～）

四

梅に名をえし大森を  
すぐれば早も川崎の  
大師河原は程ちかし  
急げや電氣の道すぐに

五

鶴見神奈川あとにして  
ゆけば横濱ステーション  
湊を見れば百舟の  
煙は空をこがすまで

六

横須賀ゆきは乗換と  
呼ばれておるゝ大船の  
つぎは鎌倉鶴が岡  
源氏の古跡や尋ね見ん

七

八幡宮の石段に  
立てる一木の大鳴脚樹  
別當公曉のかくれしと  
歴史にあるは此蔭よ

八

こゝに開きし頼朝が  
幕府のあとは何かたぞ  
松風さむく日は暮れて  
こたへぬ石碑は苔めをし

九

北は圓覺建長寺  
南は大佛星月夜  
片瀬腰越江の島も  
たゞ半日の道ぞかし

# 1 藤 沢

▶藤沢市江の島2-3-8 (→圖 p.108,109)

江の島 ▶小田急線片瀬江ノ島駅・江ノ電江ノ島駅下車15分，湘南モノレール湘南江ノ島駅下車20分

対岸の片瀬の参道を抜けて弁天橋をわたると江の島（県史跡・名勝）である。縁起では、五つの頭をもつ竜が人々を苦しめていたが、欽明天皇のころ天地がゆれ、天の暗雲の中からは天女、海中からは島が出現し、天女はその美しさにひかれて求婚する竜の望みをかなえるかわりにおとなしくさせ、これが弁才天として江の島明神になったという。1182（養和2）年、源頼朝は江の島の岩屋に文覚上人をまねいて戦勝を祈願し、ここの弁才天を勧請した。江の島明神は神仏混淆で真言宗の金亀山与願寺とも呼ばれた。その別当は鶴岡八幡宮が兼務したが、のち岩本院（岩本坊、中之坊）が岩屋本宮、上之坊が上之宮、下之坊が下之宮を管轄し、三宮とも弁才天を本尊とした。1216（建保4）年には、江の島が隆起して片瀬と陸つづきとなったこともあった。中世には霊地として雨乞いなどの祈願がなされた。「太平記」には、北条時政が江の島に参籠して子孫繁栄を祈願したところ、美女に姿をかえた竜神が現われ願いをかなえると約束したとある。そのとき竜神が残した鱗が北条氏の家紋「三鱗」の由来だという。こうした説話が伝えられるところにも、江の島信仰のひろがりを知ることができる。

室町時代の江の島は幕府直轄地の御料所となり、幕府の地方機関である鎌倉府の保護を受けていた。1450（宝徳2）年には、鎌倉府の主導権をめぐる関東管領山内上杉氏と対立した鎌倉公方足利成氏が江の島に逃げこみ、江の島合戦が行なわれた。その後、成氏は下総古河に退去して古河公方を名のつたが、江の島との関係は続いている。16世紀にはいると、後北条氏が江の島を勢力下におさめ、古河公方も1554（天文23）年に後北条氏に敗れ、1582（天正10）年には足利義氏が死去して絶えてしまう。戦国時代の江の島について



江の島神社中津宮

は、後北条氏の直轄地  
 なのか、それともいず  
 れの領主にも属さない  
 公界所<sup>くがい</sup>なのかをめぐっ  
 て現在見解が分かれて  
 いる。

近世では徳川幕府が  
 本山末寺制度をして

寺社を統制したので、三宮  
 の別当寺である岩本院・上  
 之坊・下之坊の間で本山の  
 地位をめぐる紛争が17世紀  
 を通じて繰り返されたが、  
 けっきょく、岩本院がその  
 地位を確立した。この本末  
 紛争の背景には、江戸庶民  
 などがさかんに江の島を参  
 詣するようになり、その観  
 光収入が大きなものとなっ  
 たことがある。とくに、  
 1689（元禄2）年にはじま  
 ったと考えられる弁才天の  
 開帳は、巳と亥の年、つま  
 り6年ごとに行なわれるな  
 らわしとなり、莫大な収入  
 を江の島にもたらした。

明治にはいると、神仏分  
 離で宗像三女神を祀る辺津  
 宮・中津宮・奥津宮と、岩  
 屋<sup>いわや</sup>からなる江の島神社<sup>えのしまじんじゃ</sup>にあ  
 らためられ、以後、今日に  
 いたるまで観光地として発  
 展してきた。

神奈川県歴史散歩（下）



### ◎江ノ島

凝灰質砂岩からなる陸けい島。つまり、もと片瀬丘陵が竜口寺の高地へと続く岬の南端であったものが、第三紀(60000〜10万年前)中頃から、第四紀沖積世(1万年前)初めごろまでに沈下―隆起―侵食という地質学上の変化をくり返しているうちに、陸地から切り離され、孤島化してしまった。

周囲およそ3キロ、面積5分の1平方キロ。高さ60・4メートルで、ちょうど直角三角形の形をなし、そのうち三分の一あたりがくびれて、山二つとよばれる形になっている。

いくつもの海侵洞窟、奇岩、岩窟がその裾をめぐる、島の頂上からは、前面に伊豆大島、左手に三浦、房総半島、右手に天城、箱根の連山、孤峯富士の眺望をほしいままにしている。

江ノ島三社祭祀の歴史は古いが、東海の名蹟として広く国内にその名をしられるようになったのは、源頼朝が養和2(1182)年に、折願、参詣した以来のことである。

### ◎八臂弁財天座像

八臂の姿で、服は宋風、顧客は藤原期をしのばせるものがある。

複雑な衣紋の線をよくまとめているところは、鎌倉彫彫刻の最盛期の写実性の結晶。

### ◎群狼奉養像の庚申塔

中津宮から奥津宮にいたる間の山二つ近く、参道脇にある。尖塔角柱型の花崗岩製で総高143cm、塔身高86cm、幅43cm。

4面一杯に計36匹の群狼がそれぞれ異なった姿態で神徳に奉養しているという構図である。

造立の年時は記されていないが、江戸時代後期ごろ、江戸の粹な信者によって寄進進立されたと思われる。

### ◎福石

杉山検校が社殿に参籠し、その結願の日の帰途に、この石につまづいてころんだとき、竹筒に入った松葉が身体をさした。これにヒントをえて管鑊かんかくの妙術を考案したといわれ、時の將軍、綱言つなごの持病をなおし、その功によって総検校を許された。

### ◎稚児ヶ淵

鎌倉相承院の稚児白菊は建長寺三徳院の自休蔵主との恋を信仰と報徳の故にふり切り、ある夜、ひそかに江ノ島に渡り、この淵から投身した。

あとを追ってきた自休は松の枝にかけられた白菊の衣をみて、ここに後追い心中した。

白菊の辞世 白菊としのぶの里ご人間はば思い入り江

ノ島と答えよ

自休の辞世 白菊の花の情けのふかき海にともに入り

江ノ島ぞうれしき



サラスヴァティー女神

サラスヴァティー Saravati プラフマー神の妻。学問、智慧、弁説、音楽の女神。語源的にはサラス(saras)（水）にヴァティー(vati)、所有をあらわすヴァットvatの女性形を加えたもので、「水をもつもの」「優美なもの」の意味であり、「リグ・ヴェーダ」においては河の名であった。「リグ・ヴェーダ」に記される二五の河の中でサラスヴァティーは最もよく知られたものであり、「最高の母、河の中の最上者、女神中の最上の女神」(二・四一)ともいわれる。河の女神としてのサラスヴァティーは作物を実らせて富をもたらし、水の浄化作用が重視されて川岸で行なわれる祭式の保護者として崇拜されるようになった。プラフマナ文献ではヴァーチュvec(言葉)と同一視され、後世には

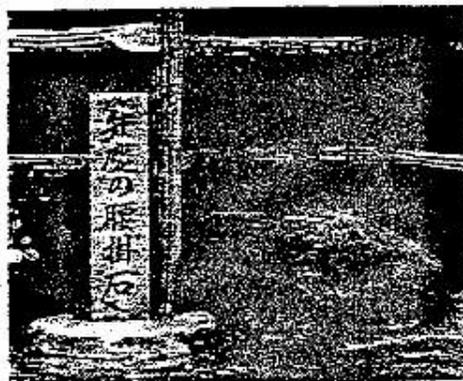
学問、智慧、弁説、音楽をはじめとする芸術の女神とされるようになった。サンスクリット語とそれを書きあらわすデーヴァナーガリー文字の作者ともいわれる。プラーナ文献では、プラフマー神の三人の妻、サラスヴァティーとサーヴィトリとガーヤトリについて記しているが、「マツヤ・プラーナ」では、これらの三人は同一人物であるとしている。

プラフマーは自分自身の光輝から一人の女性をつくり出した。この女性がシャタルパー、サーヴィトリ、ガーヤトリ、プラーフマニーなどという名で知られるようになった。プラフマーは自分がつくり出したこの素晴らしい娘を見て夢中になった。それに気づいたサラスヴァティーが父親のまなざしを避けるために右の方に遠ざかると、プラフマーの体からもう一つの顔が現われ、彼女が左の方に回り、父の背後に隠れると、さらに二つの顔が現われ、彼女が空中に飛び上がると第五の顔が現われた。もはや逃れられないと分り、彼女はプラフマーと結婚した。彼らは仲むつまじく一〇〇年を過し、人類の祖となったマヌを産んだ。マヌはスヴァヤムブヴァともヴィラートとも呼ばれた。

仏教では大弁天、弁才天、妙音天、美音天、弁天、大弁才功德天と訳され、音楽、弁才、財福、智慧の徳がある天女形で吉祥天とともに信仰されている。密教では胎蔵界曼荼羅外金剛部院に琵琶をひく図がある。



江ノ電を降り、広い通りに出て左折し、少し行ってまた左折し小道に入り、江ノ電の線路を横切ると満福寺(真言宗)がある。山号を龍護山りゅうござんといい、開山は行基と伝えるが定かでない。中興開山は1173(承安3)年に没した高範たかなんといわれる。1185(元暦2)年、平家を滅亡させた源義経が鎌倉入りを止められ、ここに滞在し、大江広元を通じて頼朝に「腰越



満福寺弁慶の腰掛石

状」を送った話は名高い。山門を入ると本堂があり、頼めば寺宝は拝観できる。本尊は薬師三尊で、弁慶筆といわれる「腰越状」の下書きがあるが当時のものとは思えない。他に江戸時代の「腰越状」の版木、弁慶所用と伝える腕・錫杖しやくじょうなどもある。境内には弁慶の腰掛石とか、弁慶が墨の水を汲んだという硯池などの伝説も残されている。

神奈川県の歴史散歩(下)

当時、腰越は鎌倉の西の関門として宿駅が設けられていた。いわば江戸における品川宿のような存在だった。ここで空しく日を過ごして十日後に義経は公文所別当の大江広元あてに一通の書状を送り、頼朝に愁訴に及んだ。この書状を世に「腰越状」という。

「恐れながら申し上げる趣旨は、かたじけなくも鎌倉どのの御代官の一人に選ばれ、後白河法皇の御使として朝敵を平らげ、父祖代々の敗戦の恥を雪すすぎました。当然恩賞の沙汰が行なわれるべきところ、意外にも佞人ねいじんの讒言によって莫大な勲功を黙殺され、過ちもないのに咎めを受け、むなしく血涙にむせんでおります……」

といった書き出しの長文の手紙は、義経の二心ない真情を切々と訴えた格調の高い文章である。この腰越状をもってしても頼朝の怒りは溶けずやむなく義経は京へ引き返す。そして幕府の追及を受け、奥州平泉に落ちのびた宗、文治五年(一一八九)藤原泰衡の軍勢に囲まれた、三十一歳で波乱の生涯を閉じるのである。

都を治つた九郎の働きは目覚ましいものがあつた。火しけにもまれて四圍に渡り、背後から屋敷の平家を衝き、更に息もつかせず屋敷の御殿に持ちこんだ。頼朝が半年かかってなした得なかつたことを、九郎はたつた一月のうちにやつてしまつたのだ。

九郎の名は日増しに高くなつた。この戦功によつて、彼の無断任官の轍轍も赦されるのではないかと噂がまわつて、目も眩れ始めていた。

が、頼朝は、至極当然のよに戦きの報をうけただけだつた。彼は九郎の無断任官を怒らなかつた代り、今度の戦功もきつて海に遊んで居る風は見せず、朝の様な静かな態度を要えなかつた。これはその後、九郎が軍監の権限時と衝突ばかりして居るとか、戦勝に驕つて専横な振舞ひが多いという噂が流れて来たときも全く同様だつた。

お妻りになられたな、兄上は……  
傍らあつて全成は時折その顔色を窺つてみる。人よりも嫉妬や猜疑の激しい筈の兄が、こうして静かさを保つて居ることが、むしろ彼には訝味味思ふられた。

平家追討が一段落すると、頼朝は頼朝に暫く鎮西に止まつて平家の旧領を沙汰することを命じ、九郎には、捕虜になつた平家宗盛以下を連れて下向するようにと云へて来た。

そして、九郎が鎮西を立つと、間もなく、突如頼朝は、無断任官した御家人たちに、ひどく激越な叱責の下文を下したのである。

この時までに、院は平家追討の行賞として、二十数名の御家人を、兵衛尉や馬允に任命して、本國に歸らずに院に仕えるかといひ、更に尾張の黒股川以東に足を踏み入れれば木領を有しあげ、斬罪に処するとまで言ひ切つたのである。が、この時もその中に九郎の名は混つていなくなつた。もし、これらを罪人とするなら、九郎とて同罪である。いや、九郎の無断任官こそ、秩序を破る基を開いたものではなかつたか……

兄は九郎をどうしようというのか？ 全成は九郎に対する決定をなぜか避けて居るようみえる兄の動きを、じつと見て居てはならないと思つた。胸のうちでは既に九郎への嫉妬も憎悪も消えていた。いや、そうしたものを既に超えた、何か掴みどころのない兄と九郎のからみあひを、思つて見ていることが、唯一、自分の生きる道であるような氣がして居たのである。

九郎は尾張黒股川を越えた。頼朝は彼を制止はしなかつた。そしてやがて彼は、足柄を越えた。それでも頼朝は黙つて居た。

鎌倉では漸く不審の音が尋まつて来た。  
——どうするのだ、九郎殿は……

——御舎弟とて、無断任官の事実は事実、それを御所は見逃されるのか？  
先に無断任官を論議された人々の中には、有力な御家人の手中も混つて居たから、その親選の間で、まず、こうした意見がくすぶつた。

——いくら捕虜護送の大臣があるとはいへ、鎌倉殿の掟を破つた人に鎌倉の地を踏ませてよいものか。  
——それでは鎌倉殿の命令の權威のほどが疑われようか……

——九郎が酒の酔に、明日は鎌倉入りをするという時に到つて最高潮に達した。

その日の昼下り——全成は海に近い自分の屋敷から御所への出仕の途次にあつた。ふと異様な氣配に目をあげたとき、御所の方から砂埃をあげて西へ向つて行く騎馬の一群を彼は見たのである。

ひどく慌しげに鞭を握つて居るその中には、日頃頼朝に近侍している小山朝光の顔もあつた。若い朝光は緊張した面持で前方を見据え、すれあつた全成に氣づかない様子だつた。その黒い旋風が、五月の陽光の下でみるみる小さくなつて行くのを見送つた全成は、御所まで行きつかないうちに、それが九郎の鎌倉入りとある使いだということを知つた。無断任官した九郎は鎌倉殿へ目通りは許されず、捕虜受取りには、改めて北条時政が差しつけられるのだという。河内守の旨で

——うむ、む……腕を組んだまま振りかへつたが、黒い旋風は、すでに余響きえも残してはいない。砂まじりの若宮大路を相変らず太陽が灼き、擡げな舞女が二人三人、腰をひねりながら、ゆらゆら歩いて行く——いつに愛らぬ鎌倉の街だけがそこにあつた。

が、全成は彼から放れた矢のゆくえを追うように、じつと朝光たちの行った方向をみつめていた。そしてやがて、ひよいと向きをかえると、御所には出仕せず、そのまま家に戻つてしまつた。

それから半月ばかりの間、全成は病氣をいいたてて門を閉じ、妻の保子にも言ひ合せて誰にもおとしなかつた。が、朝光の口上を聞いた九郎の驚愕、腰越からの款状の捧呈、頼朝の拒否、九郎の失望、短慮……これらは娘でも彼の耳に入つて来た。それだけではない、兄への取りなしを頼もうと九郎の使がひそかに会いに来たことさえあつたのだが、彼はとうとう病氣を理由に門をあげなかつた。

「御所に会わせてくれ、会えはわかる。きつとわかつて頂けるんだ！」  
她団太踏んで九郎はそう言つたという。そして遂に頼朝が赦さないと知ると、よし、それならそれで俺にも考えがある、鎌倉に不満を持つ輩はついて来い、と宣言して京へ引揚げたということだつた。最後まで兄を信じていた九郎が、それだけ絶望も深く、激憤は抑えかねたであらうことが、全成にはよくわかつた。

が、すべてはもう終つてしまつたのだ……  
全成はある夜と、浜へ出て見る氣になつた。嵐でも近いのか珍しく漁火ひとつ見えない海に、潮鳴りだけが高かつた。久しぶりの海の風が、しめりを浴びて全成を取巻き、足下の砂は濡れて重かつた。

彼は、数年前、足の下の砂を蹴り蹴り無邪気に喋つていた九郎を思い出していた。その九郎は、今は鎌倉の砂を踏めない遠くにあつた。そしてまた、兄の頼朝も、全成とは既に遠く離れた存在になつて居た……

——治承の冬、兄上の所に来たとき、俺は今の姿を想像したろうか……  
かすかな波あかりに向つて、黒衣の腕を組んだまま、全成はそこに立ちつくして居た。

——二十八の俺はもつと野心に燃えていた筈だつた。なのに、今の俺は、兄と九郎の間に立つて、敵に閉じこもることによつて、わずかに自分を支えているだけではないか……

生虜になつた宗盛を送つて来た九郎の鎌倉入りを拒んだことから、頼朝の九郎への敵意は俄かに表面化した。彼は九郎が都へ歸つたのを追いかけて、領知を許していた平家投官銀二十四か所も取上げてしまつた。これは景時が恩賞として多くの領地を賜り、かつ、播磨、美作、備中、備前、備後の警固を命ぜられたのとまさしく対照的だつた。

——執念が強い奴だな、平三は。とうとう九郎殿を追い出した。

——それにしても、なぜ御所は平三の言ふことをそれほど信用されるのか……  
義経と入れかわりに鎌倉に戻つて来た景時は、人々が畏怖と警戒の混つた眼差しで自分を見るのに氣がついた。

が、景時は誰にも弁解はしなかつた。鎌倉に入れられないと知つた義経が、ひどく憤慨し、それならもう頭は下げぬ、鎌倉に不満のある奴等はいつて来いと口走つて京へ戻つたという話を聞いた時も、ただ、そうか、と一言いつて薄く嗤つただけだつた。

いまや景時は一介の大庭の支族、鎌倉近辺の小領主ではなく、京都以西の要地の檢断にあたる実力者である。しかも人々が彼に畏怖を感じるのには、武力よりもさらに強大な力を持つからである。

——強引に御所を動かせる男……

人々はそう思つて居る。この点では三浦、小山、千葉などの豪族さえ及びもつかない。しかも頼朝さえそれを畏怖するようには、人前で時折彼に氣をかねたような恭順りを見せるのである。

景時はそれが必ずしも頼朝の真実でないことを知つて居た。めつたに本心を見せない頼朝は、誰かに動かされてという形をとつた。批難をうける恐れのあるときは特にそうだ。が、景時はそれと知りつつ進んで頼朝の意向を代弁する役を引受けた。それによつて頼朝の東國の王者としての位圖が強まるのなら何のたがひが要らう……それがひいては武家社会を押しすすめるのだという信念が益々彼を傲岸にした。彼が執拗に九郎追討を主張したのもこのためである。

新田義貞 につたよきさだ (1101-1166) 鎌倉末期から南北朝初期にかけての武将。新田氏の嫡流で、朝氏の子。小太郎と称した。元弘の変では、はじめ北条側の武将として千早城の楠木正成を攻撃したが、やがて幕府を見限って本国の上野国(群馬県)に帰り、討幕の旗上げをして鎌倉を攻め、北条一族を滅ぼした。その功によって、建武中興政府から越後守に任ぜられ、上野介および播磨介を兼ね、次いで左近衛中将となり、武者所頭人の地位についた。しかし、六波羅探題を滅ぼして建武新政権の樹立に第一の功臣と称された同族の足利尊氏としいに对立するようになり、一三三五年(建武二)尊氏が中先代の乱平定後、建武新政府に反旗をひるがえすと、尊氏追討のため東下したが、箱根・竹の下に戦って大敗した。勝ちに勝って京都市にはいった尊氏も、北畠顕家らに敗れて九州に落ちたが、すぐに陣容を立て直し東上、ふたたび京都を奪おうとした。義貞は、楠木正成らとこれを摂津湊川(神戸市内)に防ごうとしたが敗れ、皇太子恒良親王を奉じて北陸地方に下り、金が崎城(敦賀市)を根拠としてこの地方の経営にあたらうとした。しかし、足利方の斯波高経らに囲まれて城は孤立し、義貞は城を脱出して挽回をくわだてたが、成功しないうちに一三三七年(建武四・延元二)落城して恒良親王は捕えられ、義貞の長子義頼は自殺した。義貞は再挙をはかり、翌年一時、勢力を挽回したが、閏七月越前藤島(福井市)の戦いで流れ矢にあたり自殺した。藤島神社に祭られている。



花押

大日本百科事典

福村ガ崎のあたり

- ▶ 鎌倉市稲村ガ崎 <一冊 p. 87>
- ▶ 横須賀線鎌倉駅江ノ電稲村ガ崎駅下車10分

十一人塚からさらに南へすすめば七里ガ浜の海岸に出る。国道134号線を東に少し行くと古戦場で名高い稲村ガ崎(国史跡)がある。稲村ガ崎は霊仙山の丘陵が海中に突き出た岬の部分で、高さは60mある。稲村ガ崎の名の由来は、この岬を遠くからながめると刈り取った稲を積み上げた稲藁に似ていることからきているといわれている。稲村ガ崎は鎌倉時代、鎌倉の西の境界の地であり、また極楽寺坂の切通しが開かれる以前にはこの地から海岸に沿って鎌倉に入ったところである。稲村ガ崎の名がひろく知られているのは、新田義貞の鎌倉攻めのとき、義貞が電神に祈願して海中に黄金造りの太刀を投じて海岸を徒渉したとの故事のためである。この故事は「太平記」に語りつがれていたもので、いまでも一般に親しまれている。現在稲村ガ崎の周辺は公園に整備され、公園の入口には「史蹟稲村ガ崎新田義貞徒渉伝説地」の石碑と明治天皇御製の歌碑が立ち並んでいる。七里ガ浜に面した公園の西には1910(明治43)年に七里ガ浜沖で遭難した逗子開成中学生の「ボート遭難の碑」が立っており、公園の東の丘陵の上には1907(明治40)年霊仙山の山頂にしばらく滞在していたドイツ人細菌学者コッホ博士の記念碑が立っている。

稲村ガ崎から腰越の小動の岬までの浜を七里ガ浜と呼ぶが、これはかつて6町を1里と数えていたことから42町あるこの浜を称したのである。

真白き富士の嶺（七里が浜の哀歌）〔明治四十三年〕

三 角 錫 子

- 一 真白き富士の嶺 緑の江の島 仰ぎ見るも 今は涙 帰らぬ十二の 雄々しきまにまに 捧けまつる 胸と心
- 二 ポートは沈みぬ 千尋の海原 風も浪も 小さき胸に 力もつきはて 呼ぶ名は父母 恨は深し 七里が浜辺
- 三 み雪は咽びぬ 風さえ騒ぎて 月も星も 影をひそめ みたまよ何処に 迷いておわすか 帰れ早く 母の胸に
- 四 みそらにかがやく 朝日のみ光り 晴にせずむ 親の心 取金も宝も 何しに集めん 神よ早く 我も召せよ
- 五 寝間に昇りし 昨日の月影 今は見えぬ 人の姿 悲しき餘りて 寝られぬ枕に 響く波の おとも高し
- 六 姉らぬ波路に 友よぶ千島に 我もこいし 失せし人よ 尽させぬ恨に 泣くは共々 今日もあすも 斯くてとわに

明治四十三年二月発表

明治四十三年一月二十三日午後、鎌倉と江の島の中間の七里が浜の沖で返子開成中学校所有のボートが沈没し、乗組の少年十二名が全員溺死した。少年たちは返子小学校児童(十二名)が一人、小学二年生が三人、小学四年生が二人、小学五年生が五人で、最年長者は五年生の一人(二十三歳)であった。返子開成中学校校長は報を聞いてすぐ救助に向かい、横須賀警察署からは署長以下二十名が現場に急行し、漁船二十二隻(漁夫二〇〇名)が出て捜索に当たり、横須賀軍港からは駆逐艦二隻が力を添えた。遺体は一月二十七日午後五時までに全部発見されたが、二月七日返子開成中学校で大法要が行なわれ、その時この哀歌が鎌倉女学校の最上福生(四年生)全員に依って歌われた。この歌は鎌倉女学校教諭三角錫子が作り、三角女史は返子に住んでこの救助作業を目撃し、遭難者の数名前前から知っていた。

この曲はアメリカの Gardner の作曲、When we Arrive Home という歌で、これは「明治唱歌」第五巻に『夢の外』という大和田建爾氏の作詞で出ている「昔のわが宿変わらぬふるさと、夢の外に今日である」と歌い出す歌で、たとえば『夢の外』に「うれしき餘りて寝られぬ枕に」と歌う同じ節に「真白き……」のほうでは「悲しき餘りて寝られぬ枕に」と付けてある。この歌は早く学生間に歌い伝えられたので、大正五年六月「七里が浜の哀歌」という単行本となって楽譜が発行され、雑誌「月刊楽譜」にもこの歌詞が「哀悼の歌」と題して載せられ、大正七年ごろからは歌謡となって巷間に流布したが歌詞も少し変えられ、曲は長調のものが短調に替わってしまった。

定本日本の唱歌

最後の鎌倉武士

稲村ヶ崎／新田軍の鎌倉突入／北條氏 東勝寺に滅ぶ

五月二十一日の夜半、全軍を背にした新田義貞は、稲村ヶ崎の巖頭に一人立ち、兜を脱いで海上通かを伏し拜んで、龍神に祈誓を捧げた。

「義貞、今、臣たる道を尽くさんかために、斧鉞をとりて敵陣に臨む。その志、福えに正化を貸け奉って、蒼生を安からしめんとなり。仰ぎ願わくは、龍神、臣が忠義に感じて、潮を万里の外に退け、道を三軍の陣に開かぬめ給え」

至信に祈念しおわつた義貞は、腰間の黄金造りの太刀を抜き、これを海中に投げた。

その夜明け頃、奇蹟が起こった。

今まで潮が干いたことなかった稲村ヶ崎が、この日に限って潮が干いたのである。巖頭直下には、にわか二十余町もの干潟が出現した。横矢を射んと構えていた幕府の兵船は、あれよあれよという間もなく、潮に引かれて数町のかたに押し流された。すでにして、横矢は届きようもなかった。

それを見た義貞は、ただちに軍旗一旋して、全軍に突撃の下令を下した。江田、大町、里見、島山、田中、羽川、山名、桃井等々の一族はもちろん、越後、上野、武蔵、相模等々の軍勢総じて六万余騎、一斉に出撃して稲村ヶ崎の返子灘を駆け抜け、真一文字に鎌倉の中に乱入して行った。

こうして鎌倉北條氏は滅亡し、鎌倉幕府は倒れた。ときに元弘三年五月二十二日のことであった。世にも有名な新田義貞、太刀投げの一幕である。のちに、小学校唱歌にもなっている。

稲村ヶ崎 名將の 剣 投ぜし古戰場

出典は南朝びいきの癖のある「太平記」である。しかし、北朝に肩入れする傾向のある「柳松論」にも、同様のことが記されている。

「ここにふしどなりしは、稲村ヶ崎の設打、石高く道細くして、軍勢の通路無儀の所に、俄に干つて、合戦の間、干潟にて有し事、かた／＼仏神の加護とぞ人申しける」

それでは、この奇蹟は本当に起こったのだろうか。この点について、従来きわめて多くの学説や解釈がなされている。

全面的に肯定されたのは、坪井九馬三氏である。このあたりが大干潟になる。二時五十八分、は、「太平記」に「夜半許りに」とあるのと時間的にも一致する。だから奇蹟というのではなく、通常の干潮を誇張したに過ぎない」とされたのである。

これを受けて、肯定説を補強されたのは、大森金五郎氏である。みずから実験的に浅瀬を渡りし、通過可能を証明されたのである。

これに対して、全面的に否定されたのは、「太平記は史学に基なし」という論文で有名な久米邦武氏である。潮汐干満の差が、数万の大軍の通行を可能ならしめるほどに大きかったはずはない。神懸りであると考えたのである。

肯定・否定の両極端の中間にあるのが、三上参次氏の土城談話である。干潮になる時刻を察知した名將新田義貞が、得兵の士気を鼓舞するために一場の芝居を演じたというのである。

この説は、義貞麾下の多くが、上野、下野など、海を知らないものであったというこで支えられた。さらには、二日前の大筒宗氏の鎌倉突入も、夜間の干潮を利用したものであったが、後続する兵が少なかった上に、幕府のほうで控置していた本間軍などの予備軍を繰り出したために失敗したのだという解釈も現れた。

さらに、この説は発展して行き、大筒軍の干潮渡渉による鎌倉突入ということにヒントを得て、義貞は一場の芝居を演じたのだということまで進んで行った。

これらの一見科学的な現代的諸解釈に対して、より古文書、古文獻を重んずる正統派の歴史学者高柳光寿氏は、『海日記』に、

「稲村といふ所あり、さかしき岩のかきなりよせる浜をつたひ行けば、岩にあたりてさきあがる波のはなのごとくにちりかがる。」

とあることや、前記「梅松論」に、

「石路、道細くして」とあることなどを勘案されて、旧東海道の稲村ヶ崎のあたりでは、

道は相当高い所を通っていたのではないかと思う。鎌貞は千泊を通ったのではあるまい。

という結論を出しておられる。

ちなみに、最近、千葉県房総半島の突端、白旗町の海岸は、過去千年間に二、三センチほどずつ隆起する傾向にあり、その結果、毎年数メートル幅で国行地が自然発生しているということが発表された。

現在、鎌倉の西方の江の島は、本土の片瀬海岸とほぼ陸地続きになっている。しかし、室町時代のいくつかの合戦例を見ると、当時、江の島に敗兵が逃げ込むと、本土側からは船に乗って攻撃をかけるよりほか致し方がなかったという。つまりは、少なくとも湘南から房総半島にかけての地域では、中世末期から近世初期あたりから以降、現代にいたるまで、海岸一帯に隆起現象が続いているということになる。

現代の稲村ヶ崎は、たしかに渡渉可能かも知れない。しかし、六百年以上の昔、稲村ヶ崎の被打際は、今よりもさらに狭く、さらに低かったのである。その幅は、天野、大塚などのわずかな軍勢が一、二列隊で駆け抜けるほどはあったが、鎌貞麾下の六万騎という大軍が押し通れるほどはなかったに違いない。

とすると、結論は高柳氏と同じになる。やはり鎌貞軍は、相当高い所を通ったと考えざるを得ないのである。そして、このあたりで、相当高い所、というところ、橋梁寺坂路と稲村崎路との中間に屹立する標高八三メートルの望山しかない。

大干潟出現を否定する久米邦武氏や岡部周三氏も、鎌貞軍の望山通過説を唱えておられるが、その根拠にされたのが「編年詳別従」系図部所収の「和田系図」の裏書にあった文書である。「和田系図」は、金剛寺領和泉和泉庄(房前和泉)の惣下司職の和泉氏の系図である。

南北朝内乱期になって、楠木正成の弟正氏は和泉氏の養子になって、和泉正季と改めている。それから以降、和泉氏は楠木氏と同族になり、諸合戦にさいして常に楠木氏と行動をともにしている。しかし、これよりさき、鎌倉時代の和泉氏は、鎌倉御家人であった。一族の中から、幕命に従って千早城に籠る楠木正成を支援したものとされたのである。ところで、その「和田系図裏書」の中には、「三木村惣領俊連軍忠状」ともいうべきものがあり、中に容易ならぬことが記されていたのである。

五月二日、敵望山寺の大門に引き籠り、大手町の軍勢を散々に射る間、打入り難きの処、俊連條より折下って先感し、まず敵の籠る大門を打破り、致取座を被るといへども、身命を捨てて喉の間、朝敵を追落しおわんぬ。また、俊連望山寺の扉に貫めり、夜間に及びて戦うの処、また若党奥兵衛三郎俊家、右衛門尉、統を被る。

やはり、幕府軍が望山の扉から散々に矢を射下ろしたので、新田軍は稲村崎路を駆け抜けることができなかったのである。

そして、戦機を決したのは、遠く和泉園(大阪府)からわざわざ駆け下ってきた三木俊連らが、二十一日の夜、望山の扉を踏み越えたことだったのである。

鎌倉—古戦場を歩く—

# 石力助の卵

吉田克彦



江島神社の境内に、石力助の卵がある。これは、石力助が、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。

石力助の卵は、石力助が、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。



江島の鳥居宮の右手にある石力



石力助の卵の石



石力助の卵の石

石力助の卵は、石力助が、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。

石力助の卵は、石力助が、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。

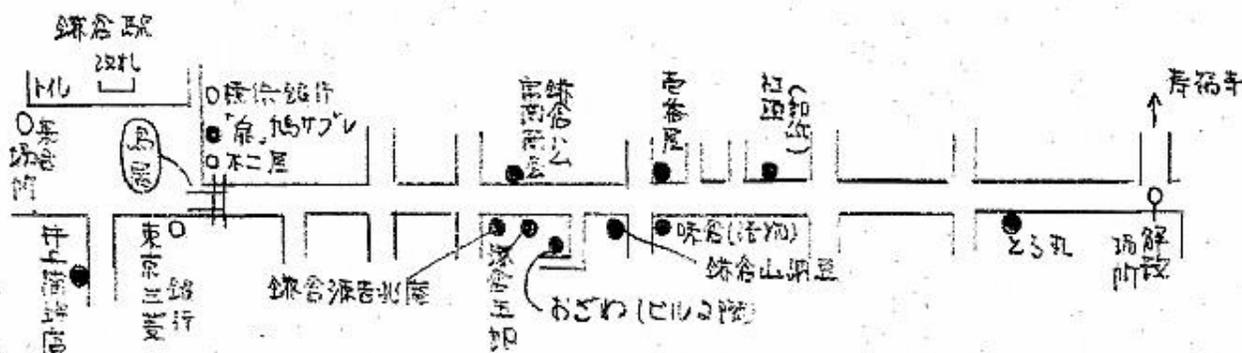
石力助の卵は、石力助が、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。石力助は、石を積み上げて、その上を歩いたという伝説から来ている。

## 今日、まわるところの関連年表

1156	保元1	保元の乱
1159	平治1	平治の乱
1167	仁安2	平清盛、太政大臣となる
1180	治承4	以仁王の乱。頼朝挙兵
1182	養和2	頼朝、戦勝を江ノ島にて祈願 石鳥居寄進
1184	寿永3	頼朝、大河土御厨を伊勢神宮に寄進。一の谷で平家敗る
1185	文治1	平家一門滅ぶ。義経櫻越状
1189	文治5	義経没
1194	建久5	久伊豆宮神人、喧嘩
1199	正治1	頼朝没
1222	貞応1	日蓮生まる
1225	嘉祿1	政子没
1242	仁治3	日蓮、比叡山へ
1245	寛元3	慈光寺銅鐘
1247	寛元5	行田市聖徳太子像。時頼、三浦泰村・光村を滅ぼす
1249	建長1	越谷市建長板碑
1252	建長4	鎌倉大仏
1271	文永8	日蓮、龍ノ口で処刑中断
1274	文永11	文永の役
1281	弘安4	弘安の役
1282	弘安5	日蓮没
1301	正安2	新田義貞生まる
1331	元弘1	楠正成、河内赤坂に挙兵
1333	元弘3	新田義貞、鎌倉攻め。鎌倉幕府ほろぶ
1337	延元2	龍口寺起こる
1338	暦応1	新田義貞没
1910	明治43	逗子開成中ボート遭難

## 鎌倉のお土産のヒント

- ◎やっぱりく鳩サブレ>といえば、和風茶寮「扉」の1階で。
- ◎和菓子なら、二軒ならんだ「鎌倉・源吉兆庵」か「鎌倉五郎本店」で。
- ◎井上蒲鉾店のく蒲鉾、梅花はんぺん、小判揚げ>。
- ◎鎌倉といえばく鎌倉ハム>は富岡商会で。
- ◎「おざわ」の玉子焼き（1,050円）の入った黄色い紙袋もいいですね。
- ◎せんべいの町・越谷からきて「老番屋」の「べっちゃんせんべい」を買う。
- ◎社頭は「和紙」のみせ。 ◎鎌倉山納豆で「納豆」を選ぶ。
- ◎とら丸は「お茶漬けの素」。 ◎味倉は「漬物」。



### 参考図書

- 炎環 永井路三著 光風社書店 53・8刊
- 神奈川県歴史散歩(下) 山川出版社 87・5刊
- 鎌倉名所図絵 鈴木亨著 鷹書房 55・3刊
- 鎌倉―古戦場を歩く― 奥宮敏之・雅子著 新人物往来社 60・7刊
- 藤沢市文化財のしおり 藤沢市教委 57・3刊
- 藤沢市文化財ハイキングコース 藤沢市教委 57・3刊
- 江ノ電沿線文学散歩 金子晋著 江ノ電沿線新聞社 60・10刊
- 交通公社のポケットガイド12 鎌倉 日本交通公社 60・1刊
- 定本日本の唱歌 堀内敏三著 実業之日本社 45・8刊
- 日本教科書体系近代編第25巻 唱歌 海後宗臣編 講談社 40・9刊
- 写真図説総合日本史 日本近代史研究会著 国文社 54・7刊
- インド神話伝説辞典 菅沼晃編 東京堂出版 60・3刊
- 日本宗教事典 村上重良著 講談社 53・11刊
- 日本大百科全書 小学館 62・9刊
- 大日本百科事典 小学館 45・9刊
- 大系「日本の歴史」5 鎌倉と京 五味文彦著 小学館 88・5刊
- 力石と力持ち(越谷出身・日本一の力持ち・三ノ宮卯之助) 講演レジュ、高島慎助 03・8